

平安時代和文における「ほこる」と「おごる」

土居 裕美子

一 はじめに——問題の所在——

本稿で取り上げる「ほこる」「おごる」は、例えば源氏物語において次のような文脈で用いられる。

(1)「さらになおほし憚りそ。天下に目つぶれ、足をれ給へりとも、なにがしは仕うまつりやめてむ。国の中の仏神は、おのれになむなびき給へる」など、ほこりるたり。その日ばかりと言ふに、「この月は季の果てなり」など、ゐ中びたる事を言ひ逃る

(玉鬘)

(2)「高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと、ほくなむおほゆべかめる。たはふれ遊びを好みて、心のま、なる官爵にのほりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつ、追従し、けしきとりつ、従ふほどは、おのづから人とおほえて

やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人にたちおくれ
て、世衰ふる末には、人に軽め侮らるゝに」 (少女)

(1)は、肥後国の豪族である大夫監が、玉鬘に求婚する場面である。縁組みを断ろうとする乳母に対して、肥後国の仏神は自分の意のままだという傲慢な物言い、強引に婚姻を迫る。(2)は、源氏が夕霧に対する教育方針を語る場面である。身分の高い家に生まれてどんな官職につくことも思いのままである、という状況から、夕霧が「世の中盛りにおごりならふ」ことを危惧し、学問を身に付けさせようという。それぞれ場面は異なるが、「ほこる」「おごる」ともに、自分の優越性を意識した高慢さ・得意げなまゐりの意味する点は共通している。現代語では、どちらも文章語的な性質を帯びており、「世界に誇る日本の伝統芸能」のように、実質・実態を伴った優越感や自負を表す「ほこる」に対し、「おごる」は「傲り高ぶった態度」のように、腹立たしい気持ちや込められたマイナス

評価語として用いられる。このように、現代語においては二語の意味の違いははっきりしているが、先の(一)「ほこる」が、田舎者の大夫監に対する批判的なニュアンスを含んでいるように、平安時代和文においてこの二語の意味は近い。このことは、古辞書においても同字に「ほこる」「おごる」両訓が施される場合が多いことから指摘できる。^(注1) 例えば『観智院本類聚名義抄』「傲」字(佛上一四一五)・「誇」字(法上 七〇一一)は次のようである。

傲 五到入 異上 ホコル 傲 或 ナラフ カリトル
号 ツコル サハカレ エゾカフ ヨル 若 笔

誇 内谷 跋 ホコル アフ
オビ トコフ ホトヌ

また、枕草子「正月寺にこもりたるは」段、能因本系に

七八はかりなるおのこ、のあいきやうつきおこりたるこゑにてさふらひ人よひ付ものなといひだけはひもいとおかし

〔『校本枕冊子』百二十四―五五〕

とある箇所は、前田本では「あい行つきほこりたるこゑにて」となっている。^(注2) このように、語形・意味ともに類似した二語であるが、その一方で、派生・複合といった語構成の面からの相違点としては次の三点が指摘できる。

まず、他の動詞と結びついて複合動詞を構成する場合、それぞれ

の構成する複合動詞は次のようになる。^(注3)

ほこる：―ありく(歩) 宇津保 ―ならふ(慣) 源氏

―ゐる(居) 源氏 ゑみ(笑) ―紫

おごる：―ありく(歩) 落窪 ―ならふ(慣) 源氏

おもひ(思) ―源氏・寢覚 おほし(思) ―源氏

両語に共通する後項「ありく(歩)」「ならふ(慣)」がある一方で、「おごる」のみに「おもひおごる」「おほしおごる」があり、心理動作語となることを示す。次に、このことと関連するかのよう
に、「おごる」は名詞「こころ(心)」と複合して「心おごり」(名詞)・「心おこりす」(サ変動詞)を構成するのに対し、「ほこる」には「心」と結びつく語形の広がりはない。

この君しもぞ、宮にとりきこえさせたまはず、さまことにかしづきたてられて、かたはなるまで心おこりもし、世を思ひすまして、あてなる心ばへはこよなけれど (源氏物語 宿木)

さらに、「ほこる」が「ほこりかなり」「ほこらしげなり」といった形容動詞系を持つのに対し、「おごる」には「おごりかなり」「おごらしげなり」といった語彙は派生しない。

下には思ひくたくべかめれど、ほこりかにもてなして、つれなきさまにしありく。(源氏物語 須磨)

以上のことを踏まえ、本稿では、まず、優越感・慢心を表す類義動詞「ほこる」「おごる」の意味用法の違いについて、それぞれから派生・複合して形成される「ほこりかなり」や「心おごり」の表現に注目しながら考察する。さらにそれを踏まえて、「心おごり」の表現が、平安時代和文においてどのような表現価値を持っていたのかを明らかにすることを目的とする。これらを通して、語形・意味の近い類義動詞の意味関係の変遷を考究する一階梯としたい。

二 「ほこる」の意味用法について

まず、動詞「ほこる」の意味用法から考察していく。複合動詞を含めて動詞「ほこる」の用例^①は、土左日記に一例、宇津保物語に二例、源氏物語に三例、紫式部日記に一例、榮花物語に一例であった。まず、源氏物語以外の用例を見る。

①乳母たちは御几帳の後ろに並み居て、いづれの宮をかまづ抱きたまふと、挑み交はして見るに、二の宮遊びたまふをかき抱きたまひて、御膝に据ゑつつ、かき撫でつつ見たまふ。(中略)上、「坊をこそまづ見むと思へ。呼びにやりて賜へ」と聞こえたまへば、「今、今日明日過ごして」とのたまふ。今宮の御乳母、いとねたしと思ふ。二の宮のは、「されどわれこそ」とてほこる

(宇津保物語 国譲下)

宇津保物語の用例①は、帝が今宮・二の宮のいずれを先にお抱き

になるかと乳母たちが注目する中、あて宮の皇子である二の宮をまずお抱きになったという場面である。二の宮を抱いた帝は、その場にはいない東宮にこそまず会いたいのだ、と言うのだが、二の宮の乳母は、東宮のことはともかくとして、帝が今宮よりも二の宮を先にお抱きになったことに優越感をおぼえる。具体的に自慢し、得意になるような出来事があり、意識する相手に対して相対的な優越感を持った心情である。

②人々の御けしきども、心ちよげなり。心のうちに思ふことあらむ人も、たゞいまはまされぬべき世のけはひなるうちにも、宮大夫、ことさらにも**ゑみほこり**たまはねど、人よりまさるうれしさの、おのづから色に出づるぞことわりなる(紫式部日記)

紫式部日記の用例②は、皇子誕生の場面である。それぞれの事情や思惑はあれ、今はみな喜びに包まれる中、特に中宮大夫はことさら「ゑみほこる」るわけではないが、自然に人よりも勝るうれしさにじんんでいる。「ゑみほこる」様子が否定されているが、先の場合①と同じく、宮仕えの中で、自分の仕えている中宮に皇子が誕生するということ、得意にならずにはいられない喜ばしい出来事があり、周囲の同僚に対する優越感が表情にでることが「ゑみほこる」と表現される。

③舵取して、幣奉らするに、幣の東へ散れば、舵取の申して奉る言は、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめ給へ」と

申して奉る。(中略)この間に、風のよければ、舵取いたくほこりて、舟に帆上げなど喜ぶ

(土左日記)

④又田楽といひて、怪しきやうなる鼓腰に結びつけて、笛吹き、さ、らといふ物突き、さまぐの舞して、あやしの男ども歌うたひ、心地よげにほこりて、十人ばかりゆく

(栄花物語 卷第十九)

土左日記の用例③は、舵取りが、自分の言葉通りに良い風が吹いたことを、栄花物語の用例④は、田楽の祭で、大宮がご覧になる前で演奏し、歌い舞い踊る晴れ晴れしさを、それぞれ得意に思いふるまう様子である。以上見たように、「ほこる」が用いられるのは、周囲に対して自慢に思い、得意になるような具体的な出来事があり、そのことによって優越感を抱いている場合であることがわかる。

源氏物語では次のようである。

⑤火影に見し顔おほし出でらる。うちとけで向かひわたる人はえ疎みはつまじきさまもしたりしかな、何の心ばせありげもなくさうときはほこりたりしよ、とおほし出づるに、にくからず、なほ懲りずまに又もあだ名立ちぬべき御心のすさびなめり

(夕顔)

軒端萩についての源氏の評価である。源氏は、かつて空蟬と碁をうつ姿を覗き見た際の様子を回想し、軒端萩の、空蟬とは対照的に

何の思慮もないかのようにはしゃいでいた姿を思い返す。この時の軒端萩の様子は、空蟬巻で次のように語られていた。

⑥にぎは、しうあいぎやうづきをかしげなるを、いよくほこりにうちとけて、笑ひなどそぼるれば、にほひ多く見えて、さるかにいとをかしき人ざまなり。あはつけしとはおほしなから、まめならぬ御心はこれもえおほし放つまじかりけり (空蟬)

控えめな空蟬に対して、華やかな魅力を放つ軒端萩の様子が源氏の目を通して描かれる。用例⑤「さうどく」、用例⑥「にぎは、しうあいぎやうづく」「うちとく」「笑ひなどそぼる」「にほひ多く見ゆ」といった語句からも分かるように、自らの若さや美しさに対する自信があふれ出ている様子が、対する空蟬の控えめな姿との対比として源氏に強い印象を与えている。また、用例⑤「何の心ばせありげもなく」、用例⑥「あはつけし」といった評価語句からは、批判的なニュアンスが感じられもするが、必ずしもマイナス評価でないことは、そのように回想する源氏自身が、用例⑤「にくからず、なほ懲りずまに又もあだ名立ちぬべき御心」、用例⑥「これもえおほし放つまじかりけり」と心を惹かれていることから分かる。

次の例は、近江君に対する評価である。

⑦あはつけきこわざまにのたまひ出づることは、こはぐしく言葉たみて、わがま、にほこりならひたる乳母の懐にならひたるさまに、もてなしとあやしきに、やつる、なりけり

(常夏)

早口で、訛りのある無骨な言葉遣いの近江君について、「わがままに」思い通りにさせてくれた乳母に甘やかされて、振るまいに品がなく見劣りがする、と述べられ、田舎びた近江君への批判が含まれている。ただし、近江君に対する視線は絶対的なマイナス評価ではなく、次のようにも語られるのである。

⑧腹立ち給顔やう、け近くあいぎやうづきて、うちそぼれたるは、さる方におかしく罪ゆるされたり (常夏)

⑨紅といふもの、いと赤らかにかいつけて、髪けづりつくるひ給へる、さる方にぎは、しく、あいぎやうづきたり。御対面のほど、さし過ぐしたることもあらむかし (常夏)

用例⑧は、五節に対して思いがつたきつい物言いをするもの、二人でたわむれている様子はそれなりにかわいげがあると評するものである。また、用例⑨のように、衣に香を焚きしめ、紅をさす姿も、「にぎは、しくあいぎやうづきたり」と評される。この、「あいぎやうづく」「にぎは、しく」といった、華やかで無邪気な愛らしさからくる魅力は、おなじ「ほこる」を用いて評価される、先の用例⑤⑥の軒端萩に共通するものであった。

また、冒頭に上げた玉鬘巻の大夫監のふるまいについては、先にも述べたように、田舎者であるにもかかわらず己の優越性を誇張した姿として描かれる。

⑩「さらになおほし憚りそ。天下に目つぶれ、足をれ給へりとも、

なにがしは仕うまつりやめてむ。国の中の仏神は、おのれになむなびき給へる」など、ほこりありたり。その日ばかりと言ふに、「この月は季の果てなり」など、ゐ中びたる事を言ひ逃る (玉鬘)

用例⑦⑧⑨の近江君と同様、田舎育ちで根柢のない独りよがりな自信ではあるが、優越感・慢心の様として「ほこる」が用いられている。用例⑤⑥の軒端萩も同様で、「何の心ばせありげもなく」自信に満ちている人柄の評価であった。

ところで、これまでの用例から、「ほこる」とされる人物は、例えば源氏物語においては、軒端萩や近江君、大夫監といったいわば脇役の人物であって、源氏や夕霧、薫や匂宮、紫の上などのような主役級の登場人物には用いられていないことに気付かれる。用例③土佐日記の「舵取」、用例④栄花物語の「あやしの男ども」が「ほこる」のも同様の傾向である。「ほこる」の主体に、後で見る「おごる」のように制限がないこと、また、誰にでも観察できるふるまいとして外から見えることは、「ほこる」が形容動詞「ほこりかなり」を派生することにも反映している。「ほこりかなり」も「ほこる」と同様、身分の低い脇役の人物に対しても用いられる。

○大尼君の孫の紀伊の守なりける、この比上りて来たり。三十七ばかりにて、かたちきよげにほこりかなるさましたり。

(源氏物語 手習)

○七日、御よろこびなどし給ふ、引きつれ給へり。若やかなるは、何ともなく心ちよげに見え給。次々の人も、心のうちには思ふこともやあらむ、うはべはほこりにみゆるころほひなりかし

(源氏物語 薄雲)

○小止みなかりし空のけしき、なごりなく澄みわたりにて、あざりする海人どもほこらしげなり

(源氏物語 明石)

これらのように、人物の内面にまでは踏み込まず、物語の一シーンとして、外から見える人物の様子を描写するのである。源氏物語以外でも同様で、

○「あはれなる妹背山、さばれ」と謡ひ戯る、様どもの、おのくくほこりに、思ふことなげなるは、「なほ、我ばかり物

思はしきはなきなめり」とうらやましく思わたされ給ふ

(狭衣物語 卷三)

○よろづのこと、人によりてことくくなり。ほこりにきらくくしく、心ちよげに見ゆる人あり

(紫式部日記)

○御前には若き人くく七八人ばかり候ひて、心地よげにほこりかなるけしきどもなり

(栄花物語 卷第八)

のように、狭衣物語の身分が低い舟人、栄花物語の年若い人々など、主体はさまざまである。またその様子は、「かたちきよげ」「きらきらし」「心ちよげ」「思ふことなげ」であって、明るさに満ちて

いる。このような「ほこりかなり」は、例えば女性の屈託のなく無邪気で愛嬌のある華やかさ、男性や身分の低い者の意気揚々とした活気に満ちた言動からの比喩として、自然や音楽の美しさにも用いられる。

○花を見ればにほひことに、紅葉を見れば色ことにはこりに、浄土の楽の声、風にまじりて近く聞こえ

(宇津保物語 俊蔭)

○はうしやうといふ手を、はなやかに弾く。声いとほこりに、にぎははしきものから、またあはれにすこし

(宇津保物語 藏開上)

以上のことから、動詞「ほこる」は、他人への優越感や、自分への自信を背景として得意になっている状態を表すことが分かった。その主体はさまざまであり、それぞれの境遇や立場から、多くは具体的な出来事を契機として、時には本来の性格として、自信にふれ、得意げな様子でふるまう。それらの様子を、外面から見た様子で判断する表現として用いられるのである。実質が伴っていない場合には批判的にも受け取られるが、特に女性の屈託のない明朗さは、愛嬌があるものとしてプラス評価にもなる。これらのことから、形容動詞「ほこりかなり」を派生し、明るく活気があり華やかな人物描写からの比喩として、自然や音楽の美しさにも用いられるようになった。

三 「おごる」の意味用法について

次に、動詞「おごる」の意味用法を考察する。複合動詞を含めて「おごる」の用例は、落窪物語に一例、源氏物語に十三例、枕草子に一例、夜の寢覚に三例であった。

まず、源氏物語の用例を見る。源氏物語における「おごる」は、先に見た「ほころ」とは異なり、源氏や夕霧といった主役の評価にも用いられる場合が多い。まず、源氏に関する用例から見えていく。

〔源氏〕

①みなこの御事をほめたる筋にのみ、大和のも唐のも作りつづけたり。わが御心地にもいたうおほしおごりて、「文王の子、武王の弟」とうち誦じ給へる、御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかの給はむとすらむ (賢木)

②帝王の限りなくかなしき物にしたまひ、さばかり撫でかしづき、身にかへておぼしたりしかど、心のま、にもおごらず、卑下して廿が内には納言にもならずなりにきかし。一つあまりてや宰相にて大将かけ給へりけん (若菜 上)

用例①は、管弦の遊びの際、源氏が帝を父や兄に持つ自らを「文王の子、武王の弟」すなわち周公旦になぞらえて、己への自負を語るものである。この時の若い源氏の慢心は、このすぐ後に朧月夜の密会が発覚して都を追われる兆しともとれる危うさであった。一

方、用例②は、朱雀院が、源氏の人柄について評価したものである。源氏の優れた人柄をほめ、父帝に心からかわいがられて育ったにもかかわらず、慢心もせず、着実に官位をあげていったことが賞賛される。この二例から、源氏が若い頃の経験を経て、「おごる」ことを自ら戒める人物となったことが分かる。源氏にとって「おごる」はマイナス評価語であり、抑制すべきふるまいであったのである。この後、親となった際にも、この経験を踏まえて夕霧を親として指導していくこととなる。夕霧に関する表現は次のようである。

〔夕霧〕

③「高き家の子として、官爵心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと、ほくなむおほゆべかめる」 (少女)

④「位浅く何となき身のほど、うちとけ、心のま、なるふるまひなど物せらるな。心おのづからおごりぬれば、思ひしづむべきくさはひなきとき、女のことにてなむ、かしこき人、むかしも乱る、ためしありける」 (梅枝)

⑤ざりとても、我方たけう思ひ顔に、心おごりして、すきぐしき心ばへなど漏らし給ふな (藤裏葉)

⑥このごろこそねびまさり給へる御盛りなめれ、さるさまのすきごとをし給ふとも、人のもどくべきさまもしたまはず、鬼神も罪ゆるしつべく、あざやかに物きよげに、若う盛りにはひを

散らし給へり（中略）女にてなにかめでざらむ、鏡を見て、
なかおこらざらむ、とわが御子ながらおほす（夕霧）

用例③は本稿の冒頭に掲げた例で、夕霧に対する教育方針として語られる。用例④は、源氏が独身の夕霧を案じて教諭す場面である。位が浅いからと安心して、「心のまま」のふるまいをせぬようにと諭す。つい慢心して心が「おごる」ことを注意し、そのような際に心を静めるよすがとして、暗に妻帯を勧める。すなわち、源氏の息子夕霧にとつても、「おごる」ことはあつてはならない、抑制されるべきふるまいであつたのである。雲居雁との結婚に際しても、源氏は用例⑤のように「心おごりす」という表現を用いて、慢心することのないようにと源氏は諭す。一方、用例⑥は、そのしばらく後、落葉宮との間での問題が生じた際の夕霧の様子を、源氏が評したものである。成熟した男盛りである夕霧の姿を見て、源氏は、鬼神も罪をゆるすほどの見事な男ぶりであつて、鏡を見て慢心しても当然だ、と我が子ながらその姿に感嘆する。自ら抑制し、また親として夕霧にも「おごる」ことを戒めてきた源氏が、晩年になつて息子の男ぶりに圧倒されたことを示す印象的な場面である。

その他の登場人物の例を挙げる。

⑦御声けはひなどあてにをかしう、さまかたち思ひやられて、哀におほゆる人の御ありさまなり。わが御姫君たちを、人に劣らじと思おこれど、此君にえしもまさらずやあらむ（紅梅）

これは按察大納言が、自分の娘たちは誰にも負けないと自賛する場面である。ここで注目されるのは、大納言が、自分の姫君たちを誰にも劣らないと思つていたが、実際には宮の御方には勝つていないのではないか、と自省する点である。前項で考察した「ほこる」においては、主体である軒端荻も大夫監も、また、他の文献の登場人物も、自分の優越性については自省も抑制注もない。「ほこる」が、身分や実際の力に関係なく、その時の本人の気持ちに根ざした晴れ晴れしい得意さであるのに対し、「おごる」は、本来他と比べて自分に特別な力があるという絶対感、全能感を背景として、自分は何をしても許されるという意識に基づいてふるまう様子を表し、そこには、「戒むべき態度」というマイナス評価が付加されているといえよう。マイナス評価という点ではさらに、浮舟がかつての小君の様子を回想する場面、小君は次のように評される。

⑧この子は、いまはと世を思ひなりし夕暮に、いと恋しと思ひし人なりけり。おなじ所にて見し程は、いとさがなくあやなくにおごりてにくかりしかど、母のいとかなしくして、宇治にも時々率ておはせしかば、すこしおよすげしま、に、かたみに思へり（夢浮橋）

このような、自分が特別だと思つていた小君のふるまいを苦々しく思う、という表現からも、いままで見てきたように、「おごる」は〈そうあつてはならない〉と規定される姿であり、マイナス評価の

語であることが分かる。このことは、他文献でも同様で、

⑨ 関白のかなし子、後の御兄、東宮の御をぢ、いまも行末もたの
もしげに、めでたきに、心ばへなどの、さる我ま、なる世とて
も、おごり、人を軽むる心なく、いとありがたくもてをさめ
たるを
(夜の寢寛 卷一)

のように、どんなに思いのままの世であっても、慢心せず、人を軽
んじない様が「ありがたし」と評価される。また、幼い子ども場の
合には、

⑩ 「沓をこれにおきて。取らん」との、しりて、うちこほめかし
ての、しれば、おとゞ、末子にてかなしうし給へば、「おごり
ありかむと思ふにこそあらめ。早うあけさせ給へ」と

(落窪物語 卷之二)

のように、可愛がられて育てられている幼い末子三郎君は、父お
とゞから沓をはいて威張つて歩こうというのだろう、と大目に見て
もらえるのである。

以上、用例に基づいて分析してきたが、ここで一度「ほこる」と
「おごる」との違いをまとめると次のようになる。どちらも、優越
感を持ち、わがまま(高慢・得意げ)にふるまう点で共通してい
るが、「ほこる」は、他人への優越感や自信を背景として得意にな
っている状態を表す。「ほこる」の主体はさまざまであり、それぞ
れの境遇や立場から、多くは具体的な出来事を契機として、時に

は本来の性格として、自信にあふれ、得意げな様子でふるまう。実
質が伴わない場合には、批判的なニュアンスが読み取れるが、本質
的には明るさを伴った様子であり、女性であれば何の憂慮もない、
無邪気で愛嬌のある華やかさや明朗さが感じられ、男性や身分の低
い者であっても、意気揚々とした活気に満ちている。一方、「おご
る」は、自分の能力や社会的立場が特別であって、何をしても誰に
でも許されるという意識を持って行動する様子を表す。物語の中で
は、特別な登場人物の評価に用いられ、「戒むべき態度・行動」で
あるという、抑制が働く、マイナス評価の語として用いられてい
た。

四 源氏物語における「心おごり」の表現について

「おごる」に「心」がつくことにより、「心おごり」という名詞を
作り、またそれが「心おごりす」という動詞ともなる。「ほこる」
にはないこの「心おごり」「心おごりす」という表現は、平安時代
和文において、なぜ、何を表すために用いられたのであるのか。「心
おごり」の表現は、落窪物語に一例、宇津保物語に一例、源氏物語
に十四例、枕草子に一例、夜の寢寛に二例、狭衣物語に三例、大鏡
に二例認められた。以下、源氏物語における「心おごり」の表現を
分析し、その表現価値について考察する。

自分は特別であるという意識を持つという本質は、単独動詞「お

「ごる」と同様であり、「心」がつくことよってさらに際だつこととなる。まず、源氏に用いられた用例から見る。

〔源氏〕

① 高やかなるをぎにつけて、「忍びて」との給へれど、取りあやまちて、少将も見つけて、われなりけりと思ひあはせば、さりともし罪ゆるしてん、と思ふ御心おごりぞあいなかりける

（夕顔）

② 心にまかせて見たてまつりつべく、人も慕ひざまにおほしたりつる年月は、のどかなりつる御心おごりに、さしもおぼされざりき

（賢木）

用例①は軒端萩との贈答の場面、小君が取り次ぎに失策をして、少将に見つかりでもしたらと心配しながらも、もしそうであつても、相手が自分だと分かれれば、許してもらえらるう、と思う慢心である。「あいなし」という言葉からも、マイナス評価であることが分かる。前項の用例⑥で、夕霧の美しさを「鬼神も罪をゆるしつべく」と評したと共通して、犯した罪を許されるほどの特別扱いを当然のことと意識する心のあり方といえよう。用例②は、六条御息所との別れに際して、かつて二人の仲が円満だった頃の若い自分の慢心をふりかえり、これほど切実な思いではなかったと回想する。「のどかなりつる御心おごり」とあるように、経験の浅い若者の思ひ上がりを悔やんでいると言えよう。恋に迷うことと言えば、

柏木にも用いられる。女三宮への恋に身を焦がし、

〔柏木〕

③ 我身かばかりにて、などか思ふことかなはざらむ、とのみ心おごりをするに、この夕べより屈しいたく物思はしくて、いかならむをりに、又さばかりにても、ほのかなる御ありさまをだに見む

（若菜 上）

とあるように、柏木の、自分の思いにかなわないことがあろうか、という慢心が「心おごり」と評されている。

このように、「心おごり」の表現は、源氏物語においては多く特別な身分の登場人物に対して、その心のあり方を評価する語として用いられる。先にも述べたように、「ほこる」が、周囲に対する優越感や自信を背景として得意になっている状態を表したのと対照的に、「おごる」は、自分は特別であつて何をしても許されるという意識に基づいてふるまう、自分の高い登場人物の特権的な言動であつた。周りから大切にされ敬われて養育された者の性質として「心おごり」が挙げられ、マイナス評価として語られるのである。以下、他の人物について具体的にみていくこととする。「心おごり」の表現で評される人物としては、葵の上が挙げられる。

〔葵の上〕

④ 同じ大臣と聞こゆるなかにも、おぼえやむ事なくおはするが、宮腹にひとりいつきかしつき給御心おごりいとこよなくて、す

こしもおろかなるをばめざましと思ひきこえ給へるを、をこ
君は、などかいとさしもと、ならは給、御心の隔てどもなる
べし

(紅葉賀)

⑤おとゝは、中宮の御母宮す所の、車おしさけられたまへりしを
りのこと、おほし出でて、「時により、心おごりして、さやう
なることななき事なりける。こよなく思ひ消ちたりし
人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と

(藤裏葉)

用例④は、源氏との冷たい夫婦仲の描写である。宮腹の一人娘とし
て大切に養育されたことからか、気位の高い葵の上を「御心おごり
いとこよなし」と評する。また、用例⑤にあるように、源氏は、賀
茂祭の日に、六条御息所が葵の上方に車を押しつけられたことを回
想し、その当時の葵の上の高慢さを「心おごりす」と評している。
次に、薫に用いられた例を見る。

〔薫〕

⑥「大將殿は、さばかり世にためしなきまでみかどのかしづきお
ぼしたるに、心おごりし給らむかし。おほしまさましかば、
なほこの事せかれし給はざらましや」など

(東屋)

用例⑥は、中君と中將君との会話の中で、話題が薫のことになり、
中將君が薫を評して述べたものである。帝に大切にされたので慢心
しているのではないかと語る。実際薫は

⑦わがおぼえのくちをしくはあらぬなめりな、さるは、いとあま

り世つかず古めきたるものを、など、心おごりせらる、

(宿木)

⑧宿世の程くちをしからざりけりと、心おごりせらる、物から

(宿木)

のように、自分の評判や運命を自負し、慢心していると描かれる。
ただし、

⑨この君しもぞ、宮におとりきこえたまはず、さまことにかしづ
きたてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思すまし
て、あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そ
め給しよりぞ、さびしき所のあはれさはさまことなりけりと、
心ぐるしくおほされて、なべての世をも思ひめぐらし、深きな
さけをもならひ給にける

(宿木)

ともあるように、かつての極端なまでの「心おごり」に対し、後
には宇治の八宮の山里暮らしを知り、それ以来深い思いやりの心を学
んだと述べられる。薫にとっても、「心おごり」は短所であって、
自戒し克服すべき心の持ち方であったと考えられる。

このように、「心おごり」の表現が、源氏物語において身分の高
い特定の主要人物に用いられて「規制すべき心のあり方」を示す指
標となっていたことは、その他の場面からも分かる。次の例は、自
分の生い立ちを知った明石中宮の心中である。

〔明石中宮〕

⑩我身は、げにうけばりて、いみじかるべき際にはあらざりけるを、対の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり、人をばまたなき物に思消ち、こよなき心おごりをばしつれ、世の人は下に言ひ出づるやうもありつらむかし、などおぼし知りはてぬ

(若菜 上)

自分が本来高貴な地位にいられるような身分ではなかったこと、紫上のおかげで人からも低く見られることなく育ったことを悟り、今までの自分が、周囲をないがしろに扱い、慢心していたと深く反省する。ここでも「心おごり」は戒むべき態度と心のあり方であった。

これらのことから、源氏物語における「心おごり」の表現は、高慢なふるまいをする「心」に焦点を当て、その「心」のあり方を規制するものであったと考えられる。すなわち、源氏物語の登場人物にとって「心おごり」の表現は、自らの感情や態度・言動を規制する指標として機能していたのである。

五 まとめと今後の課題

—— 平安時代和文における「心——」語彙 ——

以上、本稿では、優越感・慢心を表す類義動詞「ほこる」「おごる」の意味用法の違いについて、それぞれから派生・複合して形成される「ほこりかなり」や「心おごり」の表現に注目しながら考察

してきた。さらに、源氏物語における「心おごり」の表現が、どのような表現価値を持つものであるのかについて考察した。結論としては以下のようなようになる。

まず、動詞「ほこる」「おごる」はともに、優越感を持ち、わがまま(高慢・得意げ)にふるまう点で共通している。「ほこる」が、他人への優越感や自己への自信を背景として得意になっている状態を表すのに対し、「おごる」は、自分の能力や社会的地位が特別であつて、何をしても許されるのだという意識に基づいて行動する様子を表す。「ほこる」が、身分や実際の力に関係なく、その時の本人の気持ちに根ざした晴れ晴れしい優越感に根ざしたふるまいであつて、ある種の明るさを感じさせるものであるのに対し、自己の絶対感・全能感を背景とする「おごる」は、そのような立場にある高貴な登場人物にとっては、「戒むべき態度・言動」というマイナス評価が附加されていた。

このことは、「ほこる」から派生した形容動詞「ほこりかなり」「ほこらしげなり」が、登場人物の内面のあり方とは切り離された、外に現れる態度や行動を評価する語であつたことと連動している。表現の焦点が人物の心のあり方ではなく外面にある「ほこりかなり」は、例えば女性の屈託なく無邪気で愛嬌のある華やかさや明朗さ、男性や身分の低い者の意気揚々とした活気に満ちた言動からの比喩として、自然や音楽の美しさにも用いられるのである。

また、「おごる」に「心」のついた「心おごり」の表現は、特に源氏物語に盛んである。自分が特別であるという意識は、内に秘められるものではなく、態度・言動として外見にあらわれる。源氏物語で言えば、例えば葵の上のように、周囲とトラブルとなつてその内面が推察されることもある。源氏物語の世界においては、人間の行動を生み出す心のあり方に焦点をあてた「心おごり」の表現が、自らの感情や態度・言動を規制する指標として機能していたのである。

このことは、源氏物語を中心とする平安時代和文・王朝文学作品の中に、人間の行動と、それを支える心のあり方の理想像があること、そして、登場人物の性格を描き分けるキーワードとして、今回取り上げた「心おごり」の表現を一例とする「心^{注10}」の表現が、人間の行動の基となる心のあり方を規制する指標として機能していたことを示唆する。

現代でも生き続けるこの二語が、この後どのような意味関係変化を描き現代に至るのか、また、「ほこる」「おごる」を超えて、語彙体系・表現体系として考えていく視点と方法とが大きな課題として残されている。

1 注

『日本国語大辞典』（第二版）「おごる」の項・語誌欄には、次のようにある。

「観智院本類聚名義抄」には、「奢・傲・修・誇・矜・詡」などの漢字に「オゴル・ホコル」の両訓が施され、また、「書陵部本名義抄」には「オゴル（上・上濁・平）」「ホコル（上・上・平）」のアクセントが示されていて、「ほこる」との語義・語形の類似が認められる。「おごる」「ほこる」両語の第一義はほとんど類似するが、「ほこる」が「すぐれていると思う気持ちや態度を表わす」のに対し、「おごる」は「人に優越した自分の立場を当然と思つて行動する」意を表す。そこから「おごる」には江戸時代以降、③の意味（「転じて、自分のカネで飲食や物品を他人にふるまう」）が生じることになる。（内は引用者注）

また、両語の語義・語形の近さについては、早く小学館『古語大辞典』「おごる」項語誌欄に東辻保和氏が

類義の語に「誇（ほこる）」がある。両語は、第二音節がともに乙類であるうえに、図書寮本類聚名義抄によれば、アクセントもともに上上平で、語形も類似する。また、観智院本類聚名義抄には、「奢」「驕」「誇」「矜」「詡」などにオゴル・ホコルの両訓が施されていて、両語の深い関係を思わせる。

と述べておられる。

2

同じく枕草子「圓融院の御はての年」段には

・わらひねたかりる給へるさまもいとほこりかにあいきやうつきておかし
（『校本枕冊子』百四十一—三三三 能因本・三卷本・前田本 校異なし）
とある。また、源氏物語・栄花物語には

・にきわ、しうあひきやうつきおかしけるをいよ〜ほこりかにうちと

けてわらひなとそほれるは〔源氏物語大成〕八八⑥ 別本(桃園文庫本)「ほこりにかに」

・けちえんにほめ申給さまほこりにかにあいきやうづき給へり

(梅沢本 卷第三十一—第三十二⑬)

とあるように、「ほこる」から派生した「ほこりかなり」と「愛敬付く」は共に用いられることの多い表現である。一方「おこる」と「愛敬付く」が結びつく例は、本文当該箇所以外には今のところ管見に入らない。

3 東辻保和他編『平安時代複合動詞索引』(平成十五年三月 清文堂出版)による。和歌・説話文学の用例は省略。

4 以下、特に注のない場合の引用文献は以下の通り。源氏物語・

紫式部日記・土左日記・新古典文学大系 宇津保物語・新編日

本古典文学全集 栄花物語・狭衣物語・日本古典文学大系 枕

草子・枕草子全注釈 ただし、私に表記を変えたところもある。

なお、検索した文献は、竹取物語・伊勢物語・土左日記・

大和物語・平中物語・蜻蛉日記・落窪物語・宇津保物語・源氏

物語・紫式部日記・枕草子・和泉式部日記・更級日記・夜の寝

覚・浜松中納言物語・狭衣物語・栄花物語・大鏡・篁物語・堤

中納言物語・讃岐典日記の計二十一文献である。

5 当該箇所 陽明文庫本は「こ、ちよげにをどりて」とあり(『栄花物語全注釈』による)。

6 別本系「国冬本」には「おこりならひ」とある(『源氏物語大成』常夏八四七⑤)。また、この箇所の解釈には、「ほこりならふ」の主語を近江君の乳母とする考え方もある。新編日本古典文学全集頭注は「近江の君が乳母を言いなりにしてていた、とも、乳母がいばり散らしていた、とも

解される。今、後者に解しておく」として主語を乳母と捉えるが、本稿では近江君が乳母を言いなりにしていた、として考察した。なお検討を要する。

7 「ほこる」の、自省や抑制のない明るさは、本文でものべたように形容動詞「ほこりかなり」に顕著である。枕草子「心ゆくもの」段・「したり顔なるもの」段に「ほこりか」なるふるまいが述べられる。(引用は『枕草子全注釈』による)

「心ゆくもの」：おほやけわたくしおぼつかならず、聞きよくほこりに語る、いと心ゆくこちす。

(三卷本系「き、よき程に」・能因本「き、よくこほりにかに」)

「したり顔なるもの」：碁をうつに、(中略)ことかたより目もなく

して、おほくひろひ取りたるもうれしからじや。ほこりにうち笑

ひ、ただの勝よりはほこりかなり

(三卷本系にはこの箇所なし)

8 ここで述べられる、かつての薫の意識については、句宮巻において「おもひあがりたる事」と語られていた。これもまた批判的なマイナス評価の語である。

・比君は、まだしきに世のおほえいと過ぎて、おもひあがりたる事こよな

くなどぞものし給ふ (句宮)

9 源氏物語以外の文献でも「心おこり」の表現は見られるが、源氏物語ほど顕著に、登場人物の言動を規制し、性格を描く用法ではないように思われる。このことについては、今後の課題としたい。

10 拙著『平安鎌倉時代における「心いられ」の様相』(『国語語彙史の研究』第二十五集 平成十八年三月)では、焦慮を表す「いらる」に「心」のついた「心いられ」の表現を考察し、「心いられ」の表現が、特定の登場人物の性格を描き分けるとともに、世間体を意識し、自らを律するため

の指標として用いられていることを指摘した。

〔付記〕 本稿は、第五十九回高知大学国語国文学会研究発表会（平成二十二年十一月二十七日）における口頭発表「平安時代和文における『心』語彙について―『心おごり』を中心に―」として発表した内容の一部に基づいて成稿したものである。席上、多数の方々よりご意見を賜った。謹んでお礼を申し上げます。

― とい・ゆみこ、比治山大学准教授 ―